



浄應寺山門
じょうおうじさんもん

一棟

指 定 平成二十九年五月一日

所在地 いわき市平豊間字寺前

所有者 浄應寺

室町時代

桁行二・六七m、梁間一・九九m

建坪五・三五[〃]m

この山門は、もとは豊間館（樋口館）の裏門だったと伝わる。

形式は一間一戸の薬医門で、屋根は平成二十三年の東日本大震災以前は瓦葺、震災後の解体修理で銅板葺となった。文献資料は乏しいが、解体修理においていくつかの特異な技法がわかっている。

まず、部材の長さの尺度が一尺に対して五厘程の延びが見られた。中世建造物におけるさしがねの延びは従来の研究によって証明されており、当山門もそれと同様のものと考えられる。

次に、柱筋の左右男梁と中心の梁、この三本の梁と出桁では、中心の梁が若干短くなっていた。そのことが軒反りを造る作用をしているのである。このような規距術は近世にはなく、中世の規距術と言える。

垂木は、太く反り、間隔が広い（二尺二寸間）疎垂木であり、桁と垂木はダボ栓（八分角）止めとなっている。前後それぞれ七本の垂木で茅負を受ける。この単純な構造で軒反りを造っている貴重な中世の建物である。

そしてもう一つ、左側親柱には、戦国時代の城に多く利用されている集成加工が施されていた。部材の樹種はケヤキを初めいくつかの広葉樹であり、中世に大工道具の発達によって使われ始めたケヤキ等の堅木類の施工技術の一つと言える。歴史資料や墨書等の発見はなかったが、以上のように建築技法から中世の門であると考えられ、市内における貴重な建造物である。



ごほうでんちごでんがく ふりゆう ようぐるい
御宝殿稚児田楽・風流の用具類

一式

指 定 平成二十九年五月一日
所在地 いわき市錦町御宝殿
所有者 熊野神社

南北朝～昭和時代末期

国指定重要無形民俗文化財「御宝殿の稚児田楽・風流」は、豊凶占いのおほこたて、豊年祈願のざらっこ（稚児田楽）、豊年感謝の舞（風流）などで構成される祭礼である。

その稚児田楽・風流に用いられる楽器や頭、衣装などは、長い年月、地域の人々によって大切に継承されてきた。中でも、左甚五郎作と伝えられる獅子頭は、中世（二四～一五世紀ごろ）にまでさかのぼれる可能性もある古いものである。また、この獅子頭は、片方の鼻の穴が通っていないという独特の造形をしている。これには、「熊野神社から勧請する時に、行列が進まなくなつたので占うと、一夜のうちに獅子頭を作つて案内させよとのお告げがあつた。ところが一方の鼻の穴だけを残して夜が明けてしまった。それでもこの獅子頭の先導で無事到着できた」という面白い言い伝えがある。

そのほかにも、稚児田楽に使用される楽器「ざらっこ」や「太鼓」、衣装のひとつである「三つ折り笠」、また風流に使用される「頭」各種は、少なくとも江戸時代後期（一八世紀）から受け継がれているものがあつたり、他に類を見ない独特の造形であつたりするなど、祭礼や歴史を知る上で価値が高い貴重なものである。

- | | | | |
|----------|----|--------------|----|
| (1)獅子頭 | 一点 | (5)風流獅子頭 | 一点 |
| (2)風流白鷺頭 | 一点 | (6)稚児田楽・風流太鼓 | 一点 |
| (3)風流鹿頭 | 二点 | (7)三つ折り笠 | 六点 |
| (4)風流青龍頭 | 一点 | (8)ざらっこ | 七点 |



おおだてじょうあと
大館城跡

一、七二九²m

指 定 平成二十九年五月一日

所在地 いわき市好間町大館

所有者 いわき市

平市街地北西側から東方に突き出た丘陵の周辺一帯には、西から通称「大館城」、「高月館」、そして、飯野八幡宮などの中世の城館が所在しており、包括して「飯野平城」と呼称している。この丘陵東端には、近世の磐城平城跡が所在している。

大館城跡は、国道四九号と一級市道前田・鬼越線に挟まれた東西約六五〇m・南北約三五〇mの丘陵上に占地している。南・西・北西側の三方は急崖を呈し、南東側緩斜面には、主郭や二ノ郭をはじめとする四〇箇所近い曲輪などが所在する連郭式の山城である。

標高約七七mの最高峰に位置する主郭は、長さ一三〇m・幅三〇mを計る曲輪で、発掘調査により、掘立柱建物跡や土杭、柱列、ピット群などの遺構とともに、一五〜一六世紀代のかわらけや中国産白磁皿・同龍泉釜青磁、常滑系陶器甕などが出土している。主郭の東側先端部には、一部が切られた土塁と物見跡の高まりが残る。主郭の南東側約一〇m下段には、湯殿山神社が鎮座する二ノ郭や帯状の曲輪がめぐる。さらに、その下段の南東側緩斜面には、小規模の尾根を遮断する堀切や土塁などの防御施設が点在する。

嘉吉二年（一四四二）、戦国大名岩城隆忠が岩崎氏の一大拠点であった大館城を実質的に入手し、文明一五年（一四八三）岩城親隆・常隆親子や本拠を白土城から大館城に移してから、慶長七年（一六〇二）岩城貞隆の岩城領一二万石没収と近世磐城平城の築城までの、いわき地方の政治の中心的な役割を果たしたいわきを代表する城館跡である。



みさかじょうあと
三坂城跡

一四九、六三二m

指定 平成二十九年五月一日

所在地 いわき市三和町上三坂字本町

中三坂字羽生

中三坂字大根田

所有者 上三坂区、中三坂区、耕山寺ほか

三坂城は三倉城、桜城とも呼ばれ、国道四九号線の田村市との境界近くに位置する中世末期の城跡である。阿武隈丘陵の裾部を流れる夏井川の支流である三坂川を眼下に臨み、磐城領の北西部を守る要衝として存在していた。

築城されたのは不明であるが嘉吉二年（一四四二）には岩崎氏の内紛に介入した岩城隆忠側について三坂氏が登場し、その拠点と思われる。

三坂城の山頂部は二つに分かれ東側が主郭である。三坂川を堀とし、無数の堅堀・堀切、腰曲輪・帯曲輪、土塁、物見などを巧みに組み合わせ、尾根の先には物見をおくなど自然の地形を利用した山城である。標高六二二mの頂上の眺望はきわめてよく、岩城氏の最前線基地として格好の場所にある。

城主には、天正・文禄年間（一五七三〜一五九六）頃、佐竹氏の流れをくむ小川氏の一族小川越前守隆景（のち三坂と改める）が罪状したとされる。三坂城は、当時仙道と呼ばれていた現在の中通り地方の石川・白河・二階堂氏などの国境に位置しており、岩崎氏を併合して領内の安定した岩城氏は隆忠から重隆の代に田村・郡山方面に頻繁に進行して勢力を拡張しようとしており、その最前線の拠点として重要な位置を占めていた。その後岩城氏の衰退により廃城になったものと思われる。

開発の手が入らないため保存状態もよく中世末期の城郭を知る上で貴重な城跡である。また、西峰の頂上近くには薬師堂があり、大同二年に弘法大師がこの地を訪れ建立したという伝承がある。